



「野口 雨情の作品」

右の写真は、相生市立図書館前の中央公園にある野口雨情詩碑です。そこには、「相生の港はなつかし港 軒の下まで船がつく 雲の蔭から雨ふり月は 濱の小舟の中のぞく」とあります。この歌詞は、「播磨港ふし」の三節と最後の十五節です。書は雨情直筆で、非常に貴重なものです。



野口雨情は、明治15(1882)年5月、茨城県多賀郡北中郷村磯原で生まれました。雨情は、東京専門学校(現早稲田大学)英文科に入学して、坪内逍遙に師事し、三木露風らと早稲田詩社を起し新民謡を志しました。

明治40(1907)年、北海道に渡り、石川啄木とも遭遇しています。後、水戸に戻り、大正7(1918)年、「枯れすすき」を発表しました。民謡・童謡興隆に伴い、上京し、北原白秋・西条八十らと共に多くの作品を発表しました。素朴な郷土的田園的情趣の深い「船頭小唄」「波浮の港」などに見られる孤独な哀感が、「十五夜お月さん」「青い目のお人形」などにも共通する叙情性となり、広く愛唱されるようになりました。



さて、なぜ、相生の地に雨情の作品があるかというと、相生商工会に「相生小唄」の作詞を依頼され、昭和11(1936)年4月、相生を訪れ、『播磨港ふし』を作詩したことによります。

著名な野口雨情の作品が、相生の地に残っていることは、誇りに思いませんか。